

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

大阪大学消化器外科での研修を終えて

山梨大学医学部外科学講座第一教室

仲山 孝

今回、日本臨床外科学会国内留学プログラムにて、大阪大学大学院医学系研究科外科系臨床医学専攻外科学講座消化器外科学（大阪大学消化器外科）へ2024年12月9日～12月15日までの1週間、国内留学をさせていただきました。まずこのような機会を与えて頂き、日本臨床外科学会会長の万代恭嗣先生、国内外科研修委員会委員長の高山忠利先生、大阪大学大学院医学系研究科外科系臨床医学専攻外科学講座消化器外科学の土岐祐一郎教授、江口英利教授に感謝申し上げます。また、研修プログラムを手配頂きました植村 守先生、直接ご担当頂きました波多 豪先生にも感謝申し上げます。

私は下部消化管を専攻させて頂き修練しておりますが、大阪大学消化器外科は国内の臨床、手術、研究全てにおいてトップレベルであり、学会等でも最先端の発信をされていることを感じていたため、当科の市川大輔教授にぜひ研修させて頂きたいとお伝えし、送りだして頂きました。

初日は朝のカンファレンスから参加させて頂き、若手の先生方中心に綿密な術前症例提示を行っていました。もちろん丁寧にディスカッションされていましたが、働き方改革が推進されているとのこと、重要なポイントのみを共有しており、勤務時間内に業務を集約されていることは非常に重要なことであると感じました。

手術に関しては上行結腸癌に対するロボット支援右半結腸切除術、直腸癌に対する腹腔鏡下高位前方切除術、直腸癌CRT後のロボット支援低位前方切除術（TaTME）+側方郭清、虫垂粘液癌に対する腹腔鏡下回盲部切除術と様々な手術に関わらせて頂きました。今回とても楽しみにしていたことは、学会や動画サイトで拝見する、いわゆるチャンピオンビデオではなく、日常診療に触れることができるということでした。一つ一つの症例は困難な局面もありましたが、指導医の先生、また専攻医の先生も一丸となって高いレベルの手術を遂行しておりました。さらに、指導医の先生方は教育的なコミュニケーションを専攻医の先生方と図っており、次世代への外科教育もされている姿は大変感銘を受けました。

関連施設とも密に連携されており、植村 守先生が他施設に手術指導に行かれる際に同行させて頂きました。高いレベルでの手術指導はもちろん、相談症例にも丁寧に対応されていることから、大阪の消化器外科診療が大学病院以外でも高い水準で維持されていることを感じました。

私と同世代の先生の手術を見せて頂いたのも貴重な経験でした。普段は同世代の手術をみる機会が少ないため、主体的かつ円滑な手術を見ることができたのは、私自身にとって非常に良い刺激となりました。

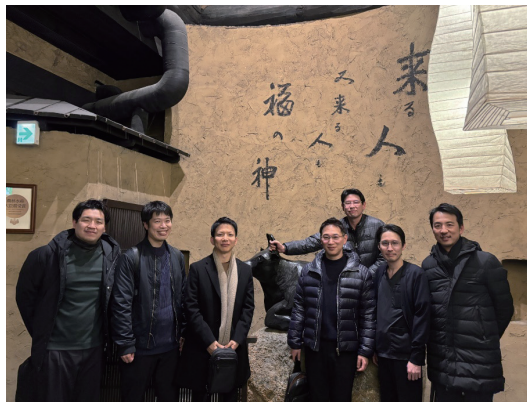
研究面においても実際に様子を伺うことはできませんでしたが、医局前には多数の論文実績が掲載されておりました。これだけのhigh volume centerであり、日常診療が忙しい中でもacademic surgeonとして日本の消化器外科学を牽引されている姿に、少しでも近づけるように頑張りたいと改めて感じました。

お忙しい中でも下部消化管チームの先生方には懇親会を開いて頂き、普段の診療のことから今後の消化器外科医の在り方など、様々なお話を聞かせて頂きました。プライベートの時間も大切にしており、私生活、仕事のバランスも大変勉強になりました。

今回研修期間を1週間とさせて頂きましたが、とても適切な研修期間であったと感じております。この短期間においては技術などを習得するのは困難であるため、自施設との相違点や手術場の雰囲気、またトップの先生方が常に何を考え診療に向き合っているのかを感じることを目標としておりました。実

際1週間という限られた時間の中で、間延びすることなく集中して研修することができたと思います。何より、私自身のモチベーションが上がったことが一番の収穫だと感じております。井の中の蛙大海を知らず、とならないためにも大変有意義プログラムであり、後輩にもぜひ経験して欲しい思いました。今回の一期一会の出会いを大切に、また高まったモチベーションを維持しつつ山梨の外科診療に還元できるように精進して参ります。

最後に、快く国内留学プログラム研修を受け入れて下さった大阪大学消化器外科の先生方、特に下部消化管チームの先生方に改めて感謝申し上げます。研修報告とさせていただきます。本当に有難うございました。



懇親会にて：

右より）波多 豪先生、関戸悠紀先生、（上段）荻野崇之先生、植村 守先生、仲山、加藤伸弥先生、竹田充伸先生